

マタイによる福音書 4:1~11

おはようございます。さて、イエス様が40日40夜、サタンからの誘惑を受けたこの荒野での出来事については皆さんもよくご存じのことと思います。それは、過酷な環境下、イエス様が悪魔に打ち勝たれたこの出来事は、イエス様の十字架と復活の先取りとして語られているからです。それゆえ、ここでのことは、単に勝った負けた話ではありません。ここでのことがイエス様の洗礼の出来事の直後であるように、この時のイエス様の上に鳴り響いていたもの、それが、神様の「これは私の愛する子、私の心に適う者」というこの神様の御声でありました。そして、先週もお伝えしたように、それが洗礼を受けた私たちの上にも同じように鳴り響いているのであり、それゆえ、洗礼を受け、イエス様と同じ一つの命に生き、イエス様と同じものを見つめている私たちにとっては、ここでのことは、私たちが見ている世界そのものであるということです。つまり、ここに私たちの生の現実があるということです。従って、このイエス様の勝利が私たちを励まし、また、荒野における私たちの希望となり得るのはそれゆえのことですが、けれども、ここに記されていることはそれだけではありません。それは、洗礼を受け、イエス様と同じように神様の祝福に与る私たちが導かれる場所、それが荒野であるということです。それも、物見遊山のようにそのようにそのような場所に連れて行かれるのではなくて、悪魔から誘惑を受けるために連れて行かれるということです。では、そこで私たちが置か

れたこの世界は私たちの目にどのように映るのでしょうか。

私たちがもし自分がこのような過酷な状況に置かれたとして、その時、私たちはその責めを誰かに押しつけないわけには参りません。それゆえ、悪魔は格好の相手であるように思うのですが、ただ、聖書では、ちょうどヨブがそうであるように、それが神様の御心によってなされるものであると言うのです。それは、神様の御心を明らかにするためでもあります。ただ、その当事者であり、神様の独り子であるイエス様に対して、それが本当に必要なことなのでしょうか。なぜなら、イエス様には神様の御心は十分すぎるほどに分かっていたはずで、では、何のためにイエス様のことを神様は荒野へと導こうとされたのか、それは、イエス様と同じ命に生き、同じものを見つめる私たちのためです。なぜなら、救い主として私たちが暮らすこの世界に遣わされたのがイエス様であるように、つまりは、ここでのことは、イエス様と私たちとが同じであるために必要なものであったということです。それは、この世を生きる私たちに、生きるということがどういうものであるかを、神様がイエス様を通して知らしめるためでもありました。

ですから、御言葉がイエス様の勝利を伝えるのはそのためでもありますが、では、ここでのイエス様の姿をご覧になって、皆さんは率直に何を思うのでしょうか。機知によって悪魔の策略を見事に蹴散らしたイエス様ではありますが、しかし、この悪魔との対決において、イエス

様はスーパーヒーローのような派手なアクションをなさいません。むしろ、悪魔に対しては終始受け身の姿勢でいるのです。つまり、打ち負かそう、打ちのめそうという積極性には欠けていたということです。それは、悪魔の問いかけに対し、イエス様が「神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」「あなたの神である主を試してはならない」「あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ」とこう答えているように、自分の力を誇示することがイエス様のメシアたる存在理由ではないからです。神様に徹底してお仕えするところがイエス様のメシアたるその存在理由であり、つまり、積極性にかけているように見えるのは、そういう意味ですべてを神様にお任せしているからです。ただし、派手なアクションをしていないのにはもう一つの別の理由がありました。それは、御言葉が「空腹を覚えられた」と語るように、40日40夜の荒行に挑んだイエス様には、最早、悪魔と正面から戦えるほどの力が残ってはいなかったからです。

しかし、この過酷な状況を克服する上での手立てがイエス様にまったくなかったわけではありません。悪魔がイエス様に向かって「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ」と言っているように、パンを石に変えるくらいのは、神の子であるイエス様にとってはお茶の子さいさいのことでもあったからです。けれども、イエス様は敢えてその力を封印している。それは、徹底して神様にお任せしているからでもありますが、ですから、そういう意味で、徹底してメシアとして歩もうとしたのがここでのイエス様でもありました。けれども、人間としての弱さに徹したその姿を私たちはどのように見なすのでしょうか。それは、愚かで頼りないだけでな

く、その頑ななまでの拘りは常軌を逸していると思えるのでしょう。けれども、パウロが「十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、私たち救われる者には神の力です」と語っているように、このイエス様のた姿の中にこそ、私たちにとっての救いの力があるのです。従って、神様がイエス様に愚かさに徹することを求められたのはそれゆえのことでもあります。それゆえ、この世を生きる私たちに求められていることは、この愚かさに徹することでもあるのです。

そして、それは、洗礼を受けた私たちとイエス様が見ている世界がまったく同じだからです。しかも、その私たちの先に立ち、また、後に立って共に歩んでくださっているのがイエス様あるわけですから、私たちのことを一番よくご存じであるのがイエス様であるということです。従って、そのイエス様のことを誰よりもよく知っているのが私たちであるはずですが、しかし、そのイエス様についてよく分かっているのはどうやら私たちだけではないようです。悪魔もその一人で、しかも、もしかしたら私たちに以上によく分かっていたように思うのです。ですから、この悪魔については、イエス様についてだけでなく、私たちについても同じことが言えるということです。悪魔は私たち以上に私たちのことをよく知っている、ですから、ここでイエス様がスーパーヒーローのように立ち回っていないことは私たちにとってとても重要なことです。限界を感じた私たちは、弱く、愚かで、それゆえ、私たちがどう逆立ちしようとも、私たちが悪魔に打ち勝つことなどできません。むしろ、その卑しさに身をやつす私たちが正常な判断を下すことなどできようはずありません。ですから、勝った負けたではない視

点をもって私たちがイエス様と同じように、この世界を見つめることができるのはとても大事なことだと思うのです。

ただ、そこで一つ大きな問題が私たちの目の前に立ちまわります。悪魔がイエス様と対立する形でここに登場しているのは間違いありませんが、この悪魔との対決についてはいろいろな解釈が成り立つということです。例えば、悪魔がイエス様に語ったことについてですが、単純に悪意に満ちていたとだけで片付けてしまっているのでしょうか。なぜなら、人はその思い入れが強ければ強いほど、その思い入れの強さゆえに間違いを犯す者です。そして、それは、善意からでも、悪意からでも結果は同じです。たとえば、私たちがよく用いる「あなたのため」というこの言葉です。この「あなたのため」という言葉は、私たちの善意と悪意と、その両方から用いられることが多いように思うのです。私たちの中に、そうした偽善は十分に認められるものでもあるからです。そして、そうしたことは私たちの信仰において決して例外的な事柄ではありません。しかし、人を見れば泥棒と思えではありませんが、善意と悪意を一緒くたにして、すべてを悪魔の仕業と決めつけることは短絡に過ぎると言えるでしょう。ですから、そういう意味で、イエス様がここで悪魔ときちんと向き合い、対話していることはとても重要なことです。イエス様と同じものを見つめる私たちは、たとえ相手が悪魔であっても、臆することなく対話できる事実を伝えてくれているからです。ただ、イエス様をしてそれを可能ならしめているのは、イエス様には相手が悪魔であることがはっきりと分かっていたからです。だから、こいつに与することはできないと、そう思えたのでしょうか、けれども、私たちがもし悪魔から「あなたの

ため」というこの言葉を聞くときには何を思うことでしょうか。私たちはもしかしたら悪魔を天使と思い込んでしまうこともあるのでしょうか。それゆえ、騙され、失敗することもあるのですが、ただ、それは、逆であっても同じことが起こりうるものです。しかし、私たちの人間として成長は、この手の失敗と間違いを繰り返すからであり、まただから、人生において、一つ一つ経験を積み上げていくことはとても大切なことではあるのです。そして、それは私たちの信仰においても同じです。けれども、その場合の「同じ」というのはどういうことなのでしょうか。

イエス様に対する悪魔からの提案は、イエス様がこの時抱えている様々な問題の打開策ばかりです。それは、悪魔がイエス様の、その人の子としての弱さや愚かさ、悲しさをよく知っていたからでもあります。そういう意味で、イエス様に寄り添っていたのが悪魔だったと言えるでしょう。それは、悪魔がはそれだけイエス様に強い関心を抱いていたからです。手下にしたい、仲間にしたい、もしかしたら、イエス様ともっと仲良くなりたい、そう思っていたからかもしれませんが、それは、悪魔がイエス様を求めほどにこの世界で孤立していたからなのかもしれません。だから、孤独に耐えきれずに、イエス様に声をかけてしまった、そんなふうにも考えることができるでしょう。けれども、イエス様はその悪魔の申し出をすべて固辞されたわけです。それは、相手が悪魔であったからというだけではありません。それは、私たちに一つのはっきりとしたことを伝えるためです。そして、それを身をもって私たちに伝えようとしたのは、イエス様がスーパーヒーローのような超人ではなく、人の子として私たちと共に同じ場

所、つまり、この世界と一緒にいてくださる方だからです。そして、それは、かつて「やって見せ、言って聞かせてさせてみて、褒めてやらねば人動かじ」と山本五十六がいったように、私たち人間には、人に言われ、やってみなければ分からないことがあるからです。まただから、人はそこで多くを学ぶことになるのですが、では、そこで私たちが学ぶものとはどういうものなのでしょう。

間違いや失敗は、私たちの人生においては付きものです。イエス様のように疲れ、立ち上がる力すらなくなることがあり、飢えと渇きから、大きな間違いを犯すこともあるのです。そして、その責任は間違いを犯したその人にあるのは間違いありません。けれども、私たちがかつて一億総出で間違いを犯したように、私たち人間とは、そもそものところでそういうものでもあるのです。けれども、私たちと同じ人間として歩まれたイエス様はどうでしょう。人の子として歩みながらも、その軸足をしっかりと神様の御心の上に置いているのがイエス様ですが、ただ、私たちはそれが難しいと思ってしまう。それは、イエス様だから、それゆえ、イエス様にしか、と、そう思い込んでいるところがあるからです。そして、それは、私たちがイエス様のように神様の都合を優先するのではなく、自分の都合を優先しているからです。ただ、そのときの私たちの軸足はどこに置かれているのでしょうか。ですから、そこで一つ言えることは、神様への言い訳として、御言葉が私たちに与えられているわけではないということです。イエス様と同じように、イエス様と一緒に、私たちを神様の御心の上に立たしめるものが私たちにとっての聖書の御言葉であり、ですから、そのためにも私たちは御言葉の上にしっかり立って、御言葉

に聞いていく必要があるのです。まただから、私たちはそこで学ぶことになるのです。

御言葉を通し私たちが学ぶべきものは、イエス様がどういうお方であり、神様がどういうお方であるかということです。それは、そこで私たちの学ぶすべてのことが、イエス様と神様が私たちと今ここに共にいる、という、このことを知るに尽きるものだからです。それは、私たちの命が御心の内に置かれ、支えられているからで、それゆえ、私たちの血管にはイエス様の希望が流れ、また、この体にはイエス様の平安が満たされている、とそのように言うことができるのです。従って、聖霊に導かれ、荒野野での悪魔との戦いが終わるやいなやイエス様のもとに天使が現れ、仕えたとあるのは、神様の都合に生きる、そんな私たちの命の有り様がそのように語られているということです。そして、それについて私たちは、この教会という交わりの中で学ぶのですが、そのために私たちには必要なものがあります。それが、御言葉を分かち合う信仰の友であり、また、自分のために祈ってくれる主にある兄弟姉妹です。なぜなら、友との御言葉の分かち合いと、主にある兄弟姉妹との祈りは、私たちにイエス様と神様が共にあることを深く知らしめるものでもあるからです。ですから、洗礼を受けた私たちがいるべき場所は教会以外に他になく、まただから、私たちはそこで多くを学ぶことになるのです。それは、神様とイエス様と、私たちが共にあるということ、すべてはここから始まり、終わるものであるからです。祈りましょう。